
いつかみたゆめ

月の鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかみたゆめ

【Nコード】

N9590L

【作者名】

月の鈴

【あらすじ】

ある日偶然見た、告白現場。懐かしい、幼馴染み。久しぶりの、二人の時間を見られたことによって、静かな日々は、終わりを告げたのだった。

過去との再開

学校の中にある、小さな森を通って帰るんじゃないかった。

そんなことを思ってももう遅いのだ。私は、あまり、音をたてないように、じっと待つしかなかった。

「…久世くん…私と付き合ってください！」

少し離れたところで、向かい合った、男女がお決まりの告白タイムをしている。こういう時居合わせた人間は、ただ居心地が悪い。

（はやく、終わって欲しい…）心の中でそう思いながらも告白する女子を称賛する私がいる。

告白相手は、『久世悠太 学校でもトップクラスの人気者…勉強・運動文句無し、そして、ピアノも…因みに私の幼馴染みである』

（私には、出来ないなあ…）二人の様子を見ながら、一人落ち込む。幼馴染みに好きだと告げたことは、無い。ただ、小学校時代、クラスメイトに話したことで、それがクラス中の噂になったことがあった。

その時に私は、素直に言わずごまかした。

それ以来、高校生になっても想い続けてる。

女子生徒は、うつむきながら、立っている。返事を聞くのが怖いのだろう。悠太の顔を見たのは、肝心の言葉を発したときだけだった。

「悪い…」そんな言葉が聞こえた瞬間、女子生徒は、泣き走り去った。（終わったあ…）ため息をついて、歩き出すと、彼がこちらに気づいた。「白井…見てるなんて趣味悪いな」「身動きがとれなくて、困ってただけ。見るつもりは、無かった」

お互い、歩き出しながら文句を言う。

「私は、帰り道にここを通っただけなんだから…」

悠太に言いながらも、決して目を見ない。言うだけ言って、通りすぎようとした時…「今日暇か？」ふと聞かれた。

「はあっ？」何を聞いているのかと思うと。

一緒にピアノを弾いて欲しいと言った。

こんな風に話をするのも久し振りなのに、ピアノなんて：「どうして？一人で弾けば良いじゃない」「一人で弾きたくないんだ：」

（困った：ピアノなんてこの頃触ってない：）

でも、私が彼からの誘いを断れるはずか無かった。

森を出ると、まだ太陽がうるさく光を放ち、眩しくて目をつぶった。ピアノがある場所までは、遠くない。森を出て、一番近くの建物にある。誰も見当たらない。

（良かった。二人で歩いてるところを見られたら、あとで面倒臭い）そう思っていると、悠太が鍵が壊れた窓を開け教室に入っていく：。続いて入ると、グランドピアノが置いてあった。

悠太は、慣れた手つきで開け、軽く弾き始めた。

私は、じっと見つめながら待った。「何が良い？」恐らく、一緒に弾く曲の事だろう：。「猫踏んじやった」：少しの間の沈黙後「きらきら星変奏曲な」私に、決定権は無いらしい。（弾けるかなあ：）不安になりながら、隣に座る。何もかもが久し振りすぎて、手が震える。懐かしい：。つたないながらも、弾きながら昔を懐かしんだ。中学一年までは、時々だけど一緒に弾いた。楽しかった、あの頃は：。普通に笑えていた。毎日、特別なことは起こらない。でも、幸せだった。

ふう：と息をついて手を止める。

「下手だな：」ぐっ：いきなりかい。

「だから、猫踏んじやったって言ったでしょ！どうにか弾けるから」ふふっ隣で笑う声が聞こえる、「あのねえ：」私だって、怒ることがあるんだけど！？

「悪いな。ただ、懐かしかった：とても：又、弾きたいな」

（こいつはっ：）私は、とても顔をあげられない。嬉しくてたまらなかった。この、わずかな時間が：。そして、又、弾きたいと言ってくれたことが：。

ガラッと第三者によって戸が開け放たれた事によって、その時間も

終わった。

「久世くくん」甘い声で悠太を呼び、ズカズカと入ってくるなり、腕をつかみ絡める。「久世くん、今日はテニスの日でしょ！遅いから探したのよ」

「：お手数おかけしました。」そう言うと、さりげなく腕をほどきながら立ち上がる。

「白井：悪い、またな：」そして、悠太は教室を出て行ってしまった。残った私と第三者：もといテニス部コーチ新井美香も教室を出る。その時に、僅かだが睨まれたのは、気のせいじゃない。

昔から、そうなのだ。悠太に気のある人間は、表だって何かをしてくる訳じゃなく、小さな、嫌がらせをしたり、無意味な嫉妬をしてくる。私は、そこまでされる立場では、無いのに…。

はああと、一息ついて、帰る事にした。

少し、不安なのは、コーチとはいえ悠太と一緒にいる所を見られたことだ。

学校で、二人でいる所を見られると、下手するとお呼び出しがある。先輩方に、囲まれて、ご丁寧な訓告をされる。訓告で済めば良いが、下手すれば監視のため、登下校は、誰かついてくる等。色々面倒臭いのだ。いわゆる、ファンクラブがあり、人気のある人間に一人で近づくことは、自然と制限される。だから、今日の告白者は、色んな意味で勇気があった。

（なるように、なるしかないかあ）諦めモードで、自己完結することにした。

過去との再開（後書き）

初投稿です。導入部分ですが、ぐだぐだです。

ここまで、読んでくださった方、ありがとうございます。因みに、主人公の下の名前は、次回わかります。

動き出した日常

次の朝、登校すると何か視線が痛い。嫌だと思っても、ここまで来てどうすることも出来ない。密かに気合いを入れて、歩き出した瞬間だった。

「百合ちゃん。おはよう」と、軽いノリで、私を抱き寄せながら言う。『この男子生徒は、学校一喧嘩が強いと言われている 志岐はやと 見た目は、端正な顔立ちで、ひどい傷をつくってるのは見たこと無い。頭も、悪くない。どちらかというと、確実に良い方だろう。何故か、私を気に入ったと言い、いつも、朝このような挨拶をしてくる。』

「志岐くん、おはよう。：離してくんない：歩けないんだけど」そっけなく言いながら、手で押し退ける。そうすると、すぐ体を退き、何かあった？と聞かれた。勘の鋭い彼は、私に対する視線を心配してくれているらしい。その質問に、どう答えようか、迷った。まだ、何か起こるわけでは、無いかもしれない。根拠の無い、望みを胸に取り敢えず答えておく。

「私は、何かしたわけでは無いつもりなだけだね」というと、その時、私の小さな、声を聞いたらしい女子が、睨み付けてきた。すると：、前から、「白井百合さん、一緒に来てくださる？少し話がありますの。」

数人の女子が私の前にはだかっていた。

（ああ、やっぱりねえ）諦めてついいていこうとすると、志岐が「百合ちゃんとの時間奪う気？」と不機嫌そうに言くと、女子はやたじろいだ。唯一恐れなかった女子は、「では、改めます。ただ、白井さん？私達のお話は、聞いてもらいますからね」と言くと、他の女子を率いて去って行った。志岐にありがとうと言い、下駄箱に行く。念のため、注意しながら開ける。昔、ちょっとした悪戯がされていて、顔に怪我をしたことがあった。怪我はしたくない。慎重に

開けたのがバカらしくなるほど、何も変わりはない。上履きにも硝子などは入っていないようだ。今晩いだ靴を、袋に入れ歩き出す。今回何もなく、次は、わからない。慎重に行くことが、自分を守る術なのだ。志岐がこちらに向かってくる。教室の方向は、違いのに送ってくれるらしい。

「白井さん、おはよう」歩いていくと、優しい声で挨拶をされた。

「おはようございます。会長。」軽く、会釈をしながら挨拶をする。

『生徒会長 冷泉院隼人 二年なのに、会長で学校をまとめている。眉目秀麗という言葉があてはまるが 実は、嫌いな人間には、とても冷酷で私も引いてしまうほどだ』

「白井さん、大変そうだね。駒井をつけるよ。」と言うと、後ろから、おはようございますと言い、私の荷物を代わりに持った。駒井、白井さんを守るんだよ、じゃあねと言って、会長は、去って行った。（おおい。こんなことされたら、余計大変なんだけど）心の中の叫びは、聞こえるはずもなく、駒井さんが、「さあ、白井様、参りましょう」と促した。

志岐は、私に下らないことを話しかけながら、教室へ向かって行く。駒井さんは、私が荷物を持ちますと言っても、頑として譲らず、私の、一歩後ろを歩いている。

『駒井沙耶香 会長の秘書らしい：いつも、側に居て指示通りに動く。私と、同じクラスだが、なぜか、私を白井様と呼ぶ』そうしていると、教室についた。じゃあと志岐が去って行く。私も、じゃと返事をして席につく。クラスで何も無くても、呼び出しには、行かなければならない。ふうっと、ため息をして、鞆の中から、必要なものを取り出した。

そうしていると、HRも、始まり、いつもと同じような、時間が過ぎていく。昼休み、駒井さんが近づいてきて、お昼はどうするのか聞いてきた。いつもなら、静かなお気に入りの場所で弁当を食べるが今日は、無理だろう。

「呼ばれてるから、行って話してくる。そのあと、パンでも食べる

よ」そう言うと、驚愕し「なりません。どうしてもと、仰るなら駒井も、共に着いていきます。」予想は、していたことだ。じゃあ着いてきてと、教室を出て、呼び出した人達が居る南棟に向かった。カツカツと、靴の音が鳴り色んな人がこちらを見る。本来、一年が居る筈の無い場所だ。私は、目的の教室に行きザッと見回した。

「白井さん。わざわざ来てくださったのね。」柔らかな言葉とは、裏腹に笑っていない目が私を見た。

「笹原先輩の呼び出しですから…どこでお話しますか？」私は、少し無鉄砲だと思いつながらも、どうせなら早く済ませたいと話をしに来たのだ。「お昼はまだでしょう？お弁当をお持ちでなかったら、カフェに行きましょう」私は、承諾した。

動き出した日常（後書き）

ここからやっと、少し盛り上がってきます。
読んでくださった方、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9590/>

いつかみたゆめ

2010年10月12日00時54分発行